

両義性について

奈良敏行



先日『町の本屋という物語—定有堂書店の43年』の読書会があった。いろんな感想をいただいたのだが、定有堂の実存が両義的だ、という意見があった。矛盾したものの同居、入れ子構造の二重性などだ。場所を変えて考えてみたいと思いつづけていた。

わたしは「詩」はまったくわからない。だから詩の鑑賞という以前のことになるのだが、「生きようと生きるほうへ」という白井明大さんの一節がこころばらく気になってしかたがなかった。これは本のタイトルでもあるのだが、何度覚えようとしても覚えられなかった。なんで覚えられないのだろうというのが、気になる理由だった。

ずいぶん考えたのだが、この一節が現実に対象をもたないからだということに気がついた。このままでは説明のつかない一節なのだ。ふとこれも「実存の両義性」なのではないだろうかと思った。「生きようと」、「生きるほうへ」、この言葉の統合的なイメージをわたしは思い描くことができなかった。だから覚えられないのだ。

「生きる」「生きない」の二択を越えたものの響きがここにある。こんな短い言葉も気になる。

《戻りたいと風が鳴き越えてこいと声が呼ぶ》（「風声」）
この言葉も現実に着地できない。着地できないままに頭の中でぐるぐる回る。

《忘れなさい とティナは呼びかける

伝えなくてはと ティナはまたゆれる》（「ティナ・サガリバナ」）

前にシモーヌ・ヴェイユの「南を向いて北の星を見る」という言葉を引用したことがある。実存の両義性といっているのだろうか。この両義性は「重力」（人の不幸）の内省に根ざすものだ。白井さんはいう。

《なぜ逃げた と言われたことが何度かある

生きたかったからと

正直に答えることはためられた》（「生きる」）

『町の本屋』の読書会では、企画・進行の浜田浩之さん

がのっけに「最初に断念するものがあつたのですね」と言い切った。わたしも「断念しなければできない本屋だった」と応じた。ここが両義性の入口だろうか。でも「実存の両義性」という言葉をくれた松田裕史さんは、それが定有堂の魅力だし長くつづけられた原因だと分析した。

白井さんの言葉の二重性は、二声的といった方が正しいかもしれない。「なぜ逃げた」、これは誰が言うのだろう。人は毀損すると自分を二重に生きる。「なぜ逃げた」という発話は自分が毀損したと告げているに等しい。だから自分の言葉・声が二声になった。「生きようと生きるほうへ」は対話する二声なのだ。しかしわたしはこの対話の中に入っていないので、いつまでたってもこの言葉を自分の中に定着できない。ただこんな言葉をつぶやく人が異形に思えてならない。

ミハイル・バフチンはポリフォニーとカーニバルという概念で対話理論を語ったことがある。わたしの二重化あるいは多重化、そして価値の逆転、そんな昔考えていたことを思い出した。

白井さんの中の二声は、やがてもう一つ別の声となつていく。

《なぜという問いに

うまく答えられなくても

(中略)

でもきつと

いまいるここから

生きようと生きるほうへ》(「生きる」)

こうしてやがて「生きたいから生きるんだ」という第三の声が聞こえてくる。白井さんの詩は毀損した魂が多声化し、カーニバルのような豊かさをはらんだ。

さて、わたしはどこへ行くのだろう。生きようと生きるほうへ、入れ子構造の導くままに、日々を重ねる。

028.08.18

(参考)

『生きようと生きるほうへ』 思潮社 2015